

## トニ・モリスンの『パラダイス』について

石川和代

### On Toni Morrison's *Paradise*

Kazuyo ISHIKAWA

#### I

*Paradise* (1998) は、アメリカの黒人女性作家 Toni Morrison が1993年のノーベル文学賞受賞以後、初めて発表した作品であり、登場人物の名前をつけた、Ruby、Mavis、Grace、Seneca、Divine、Patricia、Consolata、Lone、Save-Marie の9章から構成されているが、物語は年代順には描かれず、9章で語られる物語が複雑に絡み合っている。そのため、物語の筋を把握するのが難しく、各章で語られる出来事がどのような順で起こったか、整理して考えなくてはならない。作品の時代は1976年、舞台は黒人だけの町であるオクラホマ州のルービー (Ruby) と、この町から北へ17マイル離れた所にある修道院である。物語の冒頭は、ルービーの町の9人の男たちが修道院に住む女たちを襲撃する場面の、“They shoot the white girl first. With the rest they can take their time. No need to hurry out here.”<sup>1</sup> という言葉から始まる。物語の中では、過去に父祖たちがヘイヴン (Haven) という黒人だけの町を建設し、その町が衰退し、新父祖たちが新天地ルービーを建設した経緯、ヘイヴンの町の象徴であるオーヴンが解体されてルービーへ運ばれ、時代の流れと共にその重要性が薄れていく様子などの他に、修道院に住む女たちが、各々どのような過去を背負ってあちこちからやって来て、尼僧でもないのに修道院に住むことになったか、修道院での彼女たちの生活、ルービーの町の人々と修道院の女たちのつながりなどが9章のなかにちりばめられて描かれる。物語が修道院の女の襲撃の場面から始まるため、最初に、読者はルービーの男たちがなぜ女たちを襲撃する必要があったのかという疑問をいただくことになる。この小論では、ヘイヴンおよびルービーの町の建設の経緯、オーヴンのこと、修道院に住む女たちのこと、彼女たちをルービーの人々がどのように考えていたかなどについて細かく見ていくことで、襲撃した理由を探し求め、それと関連する差別意識について考えると共に、物語の最後の場面にも目を向けたいと思う。

#### II

まず最初に、父祖たちによるヘイヴン建設について見てみたいと思う。南北戦争の後に解放された158人の黒人のグループが、ヘラルド紙の特別記事の“Come Prepared or Not at All,” (13) という見出しを見て、ミシシッピ州とルイジアナ州からオクラホマ州まで歩いて旅をして広告に述べられていた場所に着くが、誰からも受け入れてもらえない。この父祖たちは、全員が

炭坑の最も深い層からとれる石炭のように青黒い肌を持っていることから「八岩層」(8-rock)と呼ばれる筋筋に属する人々である。彼らは、自分たちが肌の色の黒さのために拒否されたことに気づく。

Walked from Mississippi and Louisiana to Oklahoma and got to the place described in advertisements carefully folded into their shoes or creased into the brims of their hats only to be shooed away. This time the clarity was clear: for ten generations they had believed the division they fought to close was free against slave and rich against poor. Usually, but not always, white against black. Now they saw a new separation: light-skinned against black. Oh, they knew there was a difference in the minds of whites, but it had not struck them before that it was of consequence, serious consequence, to Negroes themselves. (194)

八岩層の黒人たちにとって、肌の色の薄い黒人から差別され、拒否された経験は、心の深い傷となる。その後、彼らはさらに旅をして、1890年に自分たちだけの町を建設し、ヘイヴンという名前をつける。父祖たちは、大変な苦勞をしてヘイヴンの町を創設し、最初にオーヴンを作ったということである。

Living in or near their wagons, boiling meal in the open, cutting sod and mesquite for shelter, the Old Fathers did that first: put most of their strength into constructing the huge, flawlessly designed Oven that both nourished them and monumentalized what they had done. (6-7)

父祖たちにとって、オーヴンは、町の人々が料理するために共同で使用する場所であると共に、自分たちがやり遂げたことの記念碑となるものであり、この町において、オーヴンが持つ意味は極めて大きいと言える。このオーヴンの口の根元には鉄板がはめ込まれ、“Beware the Furrow of His Brow.” (86) という言葉が刻まれる。この言葉について、J. Brooks Brouson が、“To the older generation, the message found on the Oven’s plate is a clear command: ‘Beware the Furrow of His Brow’ orders the people to be obedient to God’s will and sustain the dream of the Old Fathers.”<sup>2</sup> と述べているように、この言葉の背景には、町の人々が神に対する純粋な信仰心を持ち、神の意志に従うようにとの意図があると思われる。ただし、“It is still not clear where the words came from. Something he heard, invented, or something whispered to him while he slept curled over his tools in a wagon bed.” (7) とあるように、この言葉がどこから出て来たかは、はっきりしていない。この言葉を選んだのは、Morgan 兄弟の祖父であったが、“The twins believed it was when he discovered how narrow the path of righteousness could be that their grandfather chose the words for the Oven’s lip.” (14) から分かるように、祖父がこの言葉を選んだのは、正義の道がいかに細いかを発見した時だと、Morgan 兄弟は信じている。いずれにしても、当時、町を創設して維持していくためには、町の人々全体をまとめるための、命令の役割を果たす言葉が必要であったと推測できる。

1905年には住民が1000人程であったが、1934年には500人に、それから200人になり、綿産業が崩壊したり、鉄道会社が他のところに鉄道を敷いたりしたため、1948年には80人まで減ってしまう。それで、新父祖たちが新天地を求めてヘイヴンを去り、1950年に、ヘイヴンから240マイル西に新しい町を創設し、ニューヘイヴン (New Haven) という名前をつける。3年後、K.D. の母親 Ruby が死に、それにちなんで、町の名をニューヘイヴンから正式にルービーに変えるのである。新父祖たちがヘイヴンを去る時には、町の記念碑とも言えるオーヴンを解体してトラックにのせて運び、新しい町で再び組み立てるが、ルービーの町では、料理用ストーヴもあ

り、オーヴンはヘイヴン時代のように必要ではなくなる。道具としてのオーヴンの必要性は薄れていき、その口の根元に取り付けた鉄板に刻んだ言葉もすり減って、Misnerが“*It says ‘... the Furrow of His Brow.’ There is no ‘Beware’ on it.*” (86) と言うように、「神の額の皺」という部分しか読み取れなくなっている。

ルービーの町の若者たちが、その言葉を“*Be the Furrow of His Brow*” (87) に変えようと言い、古い世代と新しい世代が集会を開き、議論した時、Deacon Morgan は次のように言う。

“*Well, sir, I have listened, and I believe I have heard as much as I need to. Now, you all listen to me. Real close. Nobody, I mean nobody, is going to change the Oven or call it something strange. Nobody is going to mess with a thing our grandfathers built. They made each and every brick one at a time with their own hands. . . . They dug the clay—not you. They carried the hod—not you.*” (85)

彼は、父祖たちが最初にオーヴンを作った時の苦勞と、口の根元の鉄板に刻んだ言葉に込めた思いを無駄にしないために、あくまで言葉を変えることに反対するのである。さらに議論が続くと、Steward Morgan が“*If you, any one of you, ignore, change, take away, or add to the words in the mouth of that Oven, I will blow your head off just like you was a hood-eye snake.*” (87) と反対し、集会が終わるのだが、Deacon と Steward は、先に述べたように、言葉を選んだのが自分の祖父であったため、絶対にその言葉を変えたくないという思いが強いとも言える。町の女たちのオーヴンに対する考えは、男たちのオーヴンに対するこだわりとは異なっている。“*The women nodded when the men took the Oven apart, packed, moved and reassembled it. But privately they resented the truck space given over to it. . . .*” (103) や、“*Oh, how the men loved putting it back together; how proud it had made them, how devoted. A good thing, she thought, as far as it went, but it went too far. A utility became a shrine. . . .*” (103) といった描写から、女たちが現実をよく把握していることが分かる。オーヴンの口の根元の鉄板に刻んだ、宗教的な言葉を絶対に変えようとする男たちの姿勢から考えると、オーヴンという実用的な道具が、男たちにとっては聖堂になってしまったと言えるだろう。

肌の色の薄い黒人から差別され、拒否されたために、八岩層の黒人の父祖たちが自分たちの町ヘイヴンを創設し、町が衰退したため、その子孫たちがニューヘイヴンを建設し、それがルービーになったことは先に述べたが、ルービーの人々が肌の色の薄い黒人を憎んでいることに、Patricia が気づく。新父祖の一人 Roger Best の娘であり、学校教師である Patricia は、ルービー建設に貢献した新父祖たちの家系図を作ろうとして、入手した情報や彼女なりの解釈を、ノートに書き込む作業を進めていくが、彼女は、自分の父 Roger Best の家系をたどっていき、ファイルに次のように書く。

Then she picked up the file for Best, Roger. On the back of the title page, labeled :

Roger Best m. Delia

she wrote: “*Daddy, they don’t hate us because Mama was your first customer. They hate us because she looked like a cracker and was bound to have cracker-looking children like me, and although I married Billy Cato, who was an 8-rock like you, like them, I passed the skin on to my daughter, as you and everybody knew I would.*” (196)

父親の Roger Best が肌の色が薄い黒人と結婚したために、その娘である Patricia も肌の色が薄く、そのために、Patricia 自身が八岩層の男性と結婚しても、結局、肌の色の薄い子どもを生み、町の人々から一家が憎まれていると解釈する。彼女は “. . . because they looked down on

you, Mama, I know it, and despised Daddy for marrying a wife with no last name, a wife without people, a wife of sunlight skin, a wife of racial tampering.” (197) とも書き、町の人々が肌の色の薄い彼女の母親を見下げ、そのような女と結婚した彼女の父親を軽蔑していたことを強調している。さらに Patricia は、子どもたちによるクリスマスの宗教劇に登場する家族が、最初の 9 家族から 7 家族に減っている点に関して、父の Roger Best に向かって “It was skin color, wasn’t it?” (216) と問いかけ、続いて “The way people get chosen and ranked in this town.” (216) と言う。Patricia は、ルービーの町では肌の色によって人々が選ばれたり、順位がつけられていることにも気づいたわけである。Patricia の章の最後の部分では、八岩層の血統を保つことについて、次のような箇所がある。

Suddenly Pat thought she knew all of it. Unadulterated and unadulteried 8-rock blood held its magic as long as it resided in Ruby. That was their recipe. That was their deal. For Immortality.

Pat’s smile was crooked. In that case, she thought, everything that worries them must come from women.

“Dear God,” she murmured. “Dear, dear God. I burned the papers.” (217)

これは、Patricia が自分が書いたノートを焼き捨てた後の場面であるが、八岩層の血統を守ろうとする男たちを悩ますものは、女から来るにちがいないということに、Patricia は、気づくのである。

物語の現在の時点において、修道院に住んでいる 5 人の女は、Consolata, Mavis, GiGi (Grace)、Seneca, Pallas である。Consolata は、孤児であった 9 歳の時にブラジルから尼僧の Mary Magna に連れられて修道院にやって来て以来、修道院で暮らしている。Mavis は、スーパーマーケットで買物をしている間に、車の中に置いてきた幼い子どもを死なせてしまい、その後、家出して修道院にたどりつく。Gigi は、母親は行方不明、父親は死刑囚という家庭から逃れて、修道院に流れつく。セネカは、幼い頃、母親に捨てられる経験をしており、自分の体を傷つける癖を持っている。彼女は恋人に面会するために刑務所に行った後で、修道院にやって来る。Pallas は、父親は弁護士、母親は画家であるが、両親は離婚している。彼女は、高校生の時に学校の用務員の Carlos と駆け落ちするが、Carlos が彼女の母親と恋仲になり、裏切られ、その後、修道院に連れてこられる。5 人の女たちは、各々が苦しい過去を背負って修道院で暮らしていると言える。

ルービーの人々の修道院の女たちに対する見方は、男たちと女たちでは異なっていたようである。ルービーの男たちの中で修道院の女と直接つながりを持ったのは Deacon Morgan と K.D. である。Deacon は Consolata と短期間ではあるが交際し、K.D. は Gigi と出合って心を引きかれ、ドライブするというように、男と女の交際の相手として見た経験しかなく、様々な過去を引きずっている修道院の女たちの真実の姿は理解していないと思われる。ルービーの女たちは修道院の女たちが売っている農産物や、バーベキュー・ソースや、おいしいパンや、とびきり辛いトウガラシを買いにしばしば修道院を訪れており、Deacon の妻 Soane は息子を Consolata に助けられてから、彼女と親しくなる。また、Sweetie は障害を持つ子どもの世話で心身共に疲れ果て、修道院へやって来たことがあり、Patricia の娘 Billie Delia も Patricia と喧嘩して家出し、しばらく修道院に滞在した経験がある。Billie Delia は Pallas に修道院について次のように語る。

“This is a place where you can stay for a while. No questions. I did it once and they were nice to me. Nicer than—well, very nice. Don’t be afraid. I used to be. Afraid of them, I mean.

Don't see many girls like them out here. . . . A little nuts, maybe, but loose, relaxed, kind of. . . . Anyway you can collect yourself there, think things through, with nothing or nobody bothering you all the time. They'll take care of you or leave you alone—whichever way you want it.” (175-176)

この言葉から、実際に修道院に滞在した経験のある Bellie Delia は、そこに住む女たちが、普通の人とは少し変わっているが親切であること、修道院が心を落ち着けて考えることのできる場所であることを理解していることが分かる。また、Peter Widdowson は “But it is the women of Ruby who have the most contact with their sisters in the Convent.”<sup>3</sup> と述べているが、次の箇所は、修道院とのつながりがあり、修道院の女たちを本当に理解しているのはルービーの町の女たちであることを暗示している。

It could be possum, raccoon, white-tail deer, or even an angry woman since it was women who walked this road. Only women. Never men. For more than twenty years Lone had watched them. Back and forth, back and forth: crying women, staring women, scowling, lip-biting women or women just plain lost. Out here in a red and gold land cut through now and then with black rock or a swatch of green; out here under skies so star-packed it was disgraceful; out here where the wind handled you like a man, women dragged their sorrow up and down the road between Ruby and the Convent. (269-270)

修道院の女たちのことを本当に理解しているのが、ルービーの町の男ではなく女であるのは、当然のことかもしれない。

男たちが修道院の女たちを良く思わない理由の一つは、彼女たちがルービーの女たちのように勤勉ではないことである。Deacon Morgan が満足を感じる町の光景を次のように描いた箇所がある。

Quiet white and yellow houses full of industry; and in them were elegant black women at useful tasks; orderly cupboards minus surfeit or miserliness; linen laundered and ironed to perfection; good meat seasoned and ready for roasting. (111)

ここには、町の女たちの勤勉な仕事ぶりが表れている。修道院を襲撃した男たちは、食料貯蔵室を見てだらしがないと感じる。

This man closes the door and joins his partner at the pantry. Together they scan dusty mason jars and what is left of last year's canning: tomatoes, green beans, peaches. Slack, they think. August just around the corner and these women have not even sorted, let alone washed, the jars. (5)

この箇所から判断すると、修道院の女たちが、町の女たちのように勤勉でないことは認めざるをえないが、男たちは、修道院を襲撃して、ねらった標的はがらくたの山だと言う。

But the target, after all, is detritus: throwaway people that sometimes blow back into the room after being swept out the door. So the venom is manageable now. Shooting the first woman (the white one) has clarified it like butter: the pure oil of hatred on top, its hardness stabilized below. (4)

男たちにとって、自分の価値基準に合わないものは、がらくたなのであろう。

修道院の女たちが、普通の女たちと異なっているのは事実である。それは、Soane が K.D. と Arnette の結婚式の披露宴に修道院の女たちを呼んだため、彼女たちがやって来た時の服装や、行動に表れている。彼女たちの服装については、次のように描かれている。

None of them was dressed for a wedding. They piled out of the car looking like go-go girls: pink shorts, skimpy tops, see-through skirts; painted eyes, no lipstick; obviously no underwear, no stockings. Jezebel's storehouse raided to decorate arms, earlobes, necks, ankles and even a nostril. (156-157)

披露宴に来るような服装とは思えない服装でやって来たのである。更に、彼女たちは、飲み物がレモネードとパンチ以外にないことが分かると、他の若者たちがやったように、オーヴンの所まで行き、大きな音で音楽をかけ、あれこれの踊りをやったということである。披露宴にふさわしくない服装でやって来て、神聖な場所となっていたオーヴンの前で大きな音楽をかけて踊るなど、男たちにとっては、許せないほど罪深いことであつたと思われる。Jill Matus は、“The Convent and its unconventional women come to be associated with sin . . . ”<sup>4</sup>と述べ、修道院の女たちが罪と関連があることを指摘している。

おそらく、修道院の墮落した女たちがルービーの町の近くに存在していることは、町の若い世代へ悪影響をおよぼすと考え、教会の代表者たちは、修道院の女たちを存続させないことを決めたものと思われるが、この結論は、いくつかの教会の代表者の統一意見であるということが、“There were irreconcilable differences among the congregations in town, but members from all of them merged solidly on the necessity of this action: Do what you have to. Neither the Convent nor the women in it can continue.” (9-10) というように描かれている。いつもは意見の異なる複数の教会の会衆の意見が、修道院とそこに住む女たちを存続させないことの決定においては、一致したというわけである。また、ルービーの町の男たちは 秘密会議を開き、町で起こったいろいろな大惨事をつなぐものは 修道院にあると結論を出す。

It was a secret meeting, but the rumors had been whispered for more than a year. Outrages that had been accumulating all along took shape as evidence. A mother was knocked down the stairs by her cold-eyed daughter. . . . And what went on at the Oven these days was not to be believed. So when nine men decided to meet there, they had to run everybody off the place with shotguns before they could sit in the beams of their flashlights to take matters into their own hands. The proof they had been collecting since the terrible discovery in the spring could not be denied: the one thing that connected all these catastrophes was in the Convent. And in the Convent were those women. (11)

この結論が修道院の襲撃へとつながっていくのだが、男たちが修道院を襲撃する目的は、“To make sure it never happens again. That nothing inside or out rots the one all-black town worth the pain.” (5) とあるように、全員黒人のルービーの町を腐敗させないためであるという。そして、襲撃する時、男たちは、神は自分たちの味方していると信じて行動する。

Bodacious black Eves unredeemed by Mary, they are like panicked does leaping toward a sun that has finished burning off the mist and now pours its holy oil over the hides of game.

God at their side, the men take aim. For Ruby. (18)

また、修道院の襲撃を企てた 9 人の男たちの話し合いを、ひそかに聞いた Lone は、次のように語っている。

But there was no pity here. Here, when the men spoke of the ruination that was upon them—how Ruby was changing in intolerable ways—they did not think to fix it by extending a hand in fellowship or love. They mapped defence instead and honed evidence for its need, till each piece fit an already polished groove. (275)

男たちは、ルービーが、耐え難いくらいに変わっていくことを語る時、友情や愛の手を差し伸べて、それを修復しようとは考えず、自分たちが修道院を襲撃することを正当化しようとしたのである。Lone は企てを止めさせようと、知り合いの所に知らせに行くが、止めさせることはできず、9人の男たちが修道院を襲撃し、女たちを殺すのである。

### III

このようにして見てみると、男たちは、八岩層の血筋を大切にするあまり、八岩層ではない人々に対して差別意識を持っていたことが分かる。また、自分たちが苦勞して建設し、これまで守ってきたルービーが、女たちによって墮落させられることに我慢ができなかったとも言える。Patricia は、9人の八岩層の男たちが修道院の5人の女を殺した理由を次のように推測している。

(a) because the women were impure (not 8-rock); (b) because the women were unholy (fornicators at the least, abortionists at most); (c) because they *could*—which was what being an 8-rock meant to them and was also what the “deal” required. (297)

この Patricia の推測は正しいと言えるかもしれない。先に述べたように、父祖たちが肌の色の薄い黒人から差別され、拒否された経験が、心の深い傷となり、その過去を受け継いだ新父祖たちは、八岩層でない人々に対して差別意識を持つようになったわけであるが、この点について、J. Brooks Brown は、“Paradise calls attention to the formative impact of humiliated and traumatic memory on collective group identity and on the individual and family.”<sup>5</sup> と述べている。ルービーの町に新しく赴任した若手の牧師 Richard Misner は、町の人々について “They were different from other communities in only a couple of ways: beauty and isolation . . . All of them maintained an icy suspicion of outsiders.” (160) と、ルービーの町の人々がよそ者に対して冷たい疑念を抱いていたことを指摘し、修道院を襲撃した9人の男たちについて次のように述べる。

Whether they be the first or the last, representing the oldest black families or the newest, the best of the tradition or the most pathetic, they had ended up betraying it all. They think they have outfoxed the whiteman when in fact they imitate him. They think they are protecting their wives and children, when in fact they are maiming them. And when the maimed children ask for help, they look elsewhere for the cause. . . . Unbridled by Scripture, deafened by the roar of its own history, Ruby, it seemed to him, was an unnecessary failure. . . . How can they hold it together, he wondered, this hard-won heaven defined only by the absence of the unsaved, the unworthy and the strange? Who will protect them from their leaders? (305-306)

この Misner の見解は正しいと考えられる。八岩層の父祖たちが肌の色の薄い黒人から差別され、そのために、ルービーの新父祖たちが八岩層の血筋を守ろうとするあまり、肌の色の薄い黒人を差別することになったのだが、肌の色によって差別したことは、肌の色の黒い黒人を差別した白人を模倣することになってしまったわけである。八岩層の黒人だけの町を守ろうという姿勢は、八岩層でない人々やよそ者を排除しようとする排他的な気持につながっていったのである。その結果、修道院の5人の女の殺害という行動を起こすことになり、町を守るつもりが、すべてを台なしにしてしまったと言える。Misner は、Patricia との会話の中で、“We live in the world, Pat. The whole world. Separating us, isolating us—that’s always been their weapon. Isolation kills generations. It has no future.” (210) と、孤立には未来がないことを強調している。考えて

みれば、白人からの人種差別のない、黒人だけの町という楽園を建設するために、父祖たちも、新父祖たちも努力してきたわけであるが、その過程で、別の差別を行ったのであり、何の差別もない楽園の建設には失敗したと言わざるをえない。

男たちの襲撃を受けた修道院の女たちは、各々が様々な苦しい過去を引きずって、別々の場所から修道院に流れついた人々であったが、修道院の中では、お互いを差別することなく暮らしていたと思われる。修道院で中心的な存在の Consolata が、修道院から出て行きたい人は出て行ってもよいと言うが、誰も出て行かない。

“If you have a place,” she continued, “that you should be in and somebody who loves you waiting there, then go. If not stay here and follow me. Someone could want to meet you.”

No one left. There were nervous questions, a single burst of frightened giggling, a bit of pouting and simulated outrage, but in no time at all they came to see that they could not leave the one place they were free to leave. (262)

修道院の Consolata 以外の 4 人の女は自由に出て行くことのできる場所を、出て行くことはできないことを悟ったのである。この後、Consolata の命令で、女たちは地下室の床をきれいに磨き、そこに服を脱いで横たわり、Consolata がそれぞれの体の輪郭を描く。そして、その輪郭の中に、各自が好きなように色づけしたり、体の部分をを描いたりする。このようなことが行われた後、女たちが大人っぽくなり、落ち着いてみえるようになる。

A neighbor would notice more—a sense of surfeit; the charged air of the house, its foreign feel and a markedly different look in the tenants’ eyes—sociable and connecting when they spoke to you, otherwise they were still and appraising. But if a friend came by, her initial alarm at the sight of the young women might be muted by their adult manner; how calmly themselves they seemed. (265-266)

この時の修道院の女たちは、以前よりも成長していたのであり、ふさわしくない服装で K.D. と Arnette の結婚式の披露宴に出かけ、オーヴンの前で大騒ぎをした時の彼女たちではないと考えることができる。また、修道院での生活は、当然、女だけの生活であるが、男を必要としないという事実は、Peter R. Kearly が “Not needing men is difficult for men to understand or accept, especially for men who built a community under the assumption of the need for strong men to defend it from outside persecution.”<sup>6</sup> と述べているように、ルービーの町を建設し、外の世界から町を守ろうとしてきた男たちには理解しがたいことであり、それが修道院の女を異質のものとして排除しようという気持ちにさせた原因の一つと考えることもできる。

地下室の床の上に各自の体の輪郭を描く前に、Consolata は、修道院の女たちに向かって、歌は歌うがけっして言葉は話さない Piedade という女性の話をするのだが、物語の最後の場面も、Piedade についての描写である。先にも述べたように、この物語の中では、Consolata を含む 5 人の修道院の女が、男たちに襲撃される。最初に白人の女が撃たれ、続いて Consolata が撃たれて死に、その他の 3 人も撃たれるのであるが、後で Roger Best が修道院に行ってみると、遺体は全て消えていたというのである。物語の第 9 章にあたる Save-Marie の章の終り近くでは、Gigi、Mavis、Seneca の 3 人がそれぞれ家族に会いに行った場面が描かれるが、これは 3 人が生き残ったということなのか、幻なのか、読者には分からない。そして、最後の場面は、Piedade についての描写であり、最初の部分は次のように描かれている。

In ocean hush a woman black as firewood is singing. Next to her is a younger woman whose head rests on the singing woman’s lap. Ruined fingers troll the tea brown hair. All the

colors of seashells—wheat, roses, pearl—fuse in the younger woman’s face. Her emerald eyes adore the black face framed in cerulean blue. Around them on the beach, sea trash gleams. Discarded bottle caps sparkle near a broken sandal. A small dead radio plays the quiet surf.

There is nothing to beat this solace which is what Piedade’s song is about, although the words evoke memories neither one has ever had; of reaching age in the company of the other; of speech shared and divided bread smoking from the fire; the unambivalent bliss of going home to be at home—the ease of coming back to love begun. (318)

ここで Piedade の歌の言葉が呼び起こすのは、修道院の女たちが共に暮らした生活を思わせる内容である。これに続く箇所は、次のようなものである。

When the ocean heaves sending rhythms of water ashore, Piedade looks to see what has come. Another ship, perhaps, but different, heading to port, crew and passengers, lost and saved, atremble, for they have been disconsolate for some time. Now they will rest before shouldering the endless work they were created to do down here in Paradise. (318)

ここで描かれる「もう一隻の船」は、修道院の女たちの乗った船と考えることもできる。果てのない仕事を担う前にしばらく休むことのできる「パラダイス」は、Consolata から Piedade の話を聞いた修道院の女たちが思い描いた夢と言えるかもしれない。

#### 注

- 1 Toni Morrison, *Paradise* (New York: Alfred A. Knopf, 1998), 3. 以後、この作品からの引用はこの版によるものとし、引用箇所の後の括弧内に、その頁を記す。
- 2 J. Brooks Brouson, *Quiet as It’s Kept: Shames, Trauma, and Race in the Novels of Toni Morrison* (Albany: State University of New York Press, 2000), 202.
- 3 Peter Widdowson, “The American Dream Refashioned: History, Politics and Gender in Toni Morrison’s *Paradise*,” *Journal of American Studies*, 35 (2001), 30.
- 4 Jill Matus, *Toni Morrison* (Manchester: Manchester University Press, 1998), 160.
- 5 J. Brooks Brouson, 195.
- 6 Peter R. Kearly, “Toni Morrison’s *Paradise* and Politics of Community,” *Journal of American & Comparative Cultures*, 23 (2000), 12.

